



2022

ドキュメント

content

01	TURN LANDプログラム始まる
03	【2022年度】TURN LANDプログラム
04	case 01 ハーモニー
08	case 02 ほうらい
12	case 03 はぁとぴあ
16	case 04 さくらんぼ
19	case 05 だんだん
22	case 06 みかんの木／フェイト
24	case 07 ももの会
26	case 08 La Mano
28	case 09 小茂根福祉園
30	case 10 ロート
31	case 11 チュブキ
32	2022年度の動き
36	座談会

2022
年度

TURN LAND プログラム

TURN LAND

福祉事業所・施設や社会的支援を行う団体がアーティストと共に、地域や協力者たちと連携しながらアートプロジェクトを実践。初年度となる2022年度は、参画施設や団体が継続的な展開を視野に活動できるよう、運営体制づくりに重点をおきながらコーディネーターが企画運営をサポート。

case 01 ハーモニー

case 03 はぁとぴあ

case 05 だんだん

case 08 La Mano

case 09 小茂根福祉園

プレLAND

福祉事業所・施設や社会的支援を行う団体がTURN LANDに取り組む準備段階として、アーティストやコーディネーターと共にアートプログラムを実施する経験を通じて、それぞれの現場に合ったアートプログラムを構想する。

case 02 ほうらい

case 04 さくらんぼ

case 06 みかんの木／フェイト

case 07 ももの会

case 10 ロート

case 11 チュブキ

TURN LAND プログラムの各種アートプロジェクトやイベント等は感染症の予防対策を徹底して実施しています。

参画施設・団体
ハーモニー

ワーク
テンギョー・クラ（アーティスト／ヴァガボンド）、
ライラ・カセム（デザイナー）、梶谷真司（東京大学哲学者）

コーディネート
加藤未礼（コーディネーター）、
テンギョー・クラ（アーティスト／ヴァガボンド）、ライラ・カセム（デザイナー）

友達の輪を大きくしながら 少しずつ地域にひらいていく

世田谷区にある就労継続支援B型事業所「ハーモニー」は、今回のTURN LAND プログラムを担当する職員の黒瀬憲司さんも施設長の新澤克憲さんもクリエイティブなことに意欲的である。施設独自の取り組みとして既に「幻聴妄想かるた」などが知られており、TURN LAND プログラムの前身のTURNではさまざまなアーティストが出入りしてきた。

しかし、街中にある小さな福祉施設にとって、自分たちらしい「地域とのつきあいかた」とは何だろうか。賑やかなバザーやお祭りだけではないハーモニーらしい外からの風の入れ方はあるだろうかと試行錯誤してきた。そして地域の人たちが障害特性を理解しながらコミュニケーションをとっていけるような取り組みを目指している。



外部から人がやって来ると緊張してしまう利用者*の方もいる。普段ハーモニーが実施している活動を共に体験することは、互いを理解するためにとっても重要なプロセスとなる。ハーモニーが区から請け負って地域の公園を清掃する活動に、アーティストやコーディネーターが参加する様子。

※ハーモニーでは障害のある利用者の方をメンバーと呼んでいる。



ハーモニーには、利用者の人たちが集まって活動する部屋の隣に大きなカウンターを設けた部屋があり、そこでは休憩したり誰かとおしゃべりしたりする。メインプログラムの一つである「珈琲どう？」は、この部屋のカウンターを利用して実施。写真は、施設の利用者の方がテンギョーさんにコーヒーの淹れ方を教わっているところ。テンギョーさんが繰り広げるチャーミングなやりとりは即興パフォーマンスとなってその場にいる人たちを異次元空間に誘うような力があつた。また、利用者の方たちは「提供する側」になることをイメージして緊張したり、その様子を楽しみつつ見守る人々の雰囲気にも励まされたりしながら、カウンター越しの間接的なコミュニケーションも楽しんだ。

コーヒーを淹れるプロセスを楽しむ 「珈琲どう？」 答えを求めない「哲学対話」

前身のTURNからこの施設と交流を継続しているテンギョー・クラさんとライラ・カセムさんに、引き続き関わってもらうことになった。二人は、いわゆる作品によって何かを表現するタイプのアーティストではない。何かを表現するというよりもその場に居合わせた人たちとのやりとりの中で、気づきやワクワク感をつくり出し、それぞれの特異なアプローチによってその場に居合わせた人たちを勇気づける稀有な存在だ。

テンギョーさんによる「珈琲どう？」は、コーヒーでも飲んでいきませんかという気軽な入り口からカウンター越しに始まるコミュニケーションの楽しみや奥深さを感じてもらおうプログラムである。始めにテンギョーさんが利用者の方にコーヒーの淹れ方を伝授するというプロセスを楽しんでもらう。そして、本番では利用者自身が勇気を出して誰かにコーヒーを淹れることに挑戦してみようというものだ。施設長の新澤さんからは事前に「薬の副作用などの影響もあり、コーヒーを淹れることに自信が持てない人がいることが心配」といった懸念を共有していたので、当日はテンギョーさんも一人一人の様子を丁寧に観察しながら臨機応変に対応することができた。その傍らでは、ハーモニーを日頃から応援してくれている人たちなどのお悩みに答える動画撮影が行われていた。テンギョーさんが以前に実施した「答えにならない喫茶店」の続編。利用者の方たちも慣れた様子で相談に取り組んだ。

ライラさんは東京大学の梶谷真司教授を招き「哲学対話」とコラージュを掛け合わせたアートワークショップを実施。答えを求めすぎない自由な発言が得意な利用者さんの特性がいかにされるのではと考えての試み。その予感的中し、利用者の方たちは哲学対話を難なくこなす。そこに立ち会った人々にとっても言葉にし難い感覚を分かち合う体験となった。



「珈琲どう？」のロゴはライラさんがベースの文字をデザインして、利用者の方がその周りに絵を描いた。共同制作ででき上がったロゴを、施設職員の黒瀬さんと一緒にシルクスクリーンでオリジナルエプロンに仕上げている。



利用者の方が「お悩み相談」に答える映像を収録している様子。

アートの側だけではない 福祉の現場を知るコーディネーターが 現場に企画を落とし込んでいく

コーディネーターの加藤さんにとって、精神障害の人たちがいる現場は初めてではない。しかし、いわゆる作品づくりではないプログラムにコーディネーターとして関わるのは初めて。成果や目的を定めずに進む現場に苦労したが、プログラムの進行サポートという裏方に徹することで、関係者が多い運営の負荷を軽減するよう配慮しながら、場を成立させてきた。

現場の状況に合わせて柔軟に対応してきた一方、単年度での区切りを必要とする事業フレームの中で、福祉事業所の魅力を捉えることと、アートプロジェクトの可能性を探ることの両方を全員がおさえながら進めるには困難さを感じざるを得なかった。そんななか、福祉の現場を知るコーディネーターが、このプログラムで新しくやって来る外部の人にも、施設の「日常」や大切にしていることを伝え、職員・利用者の方々が安心できる交流の場をつくっていった。



「哲学対話」の様子。利用者の方たちが参加するのは初めてだったが、「いつもの感じだった」と施設長が評価するくらい自然な形で場が成立していた。「問題なくやりやすかった」と梶谷さんもその場を楽しんだ様子。
※「哲学対話」は参加者が日常で感じている問いを取り上げてみんなで話し合うことを目的としたプログラム。



友達としての輪を広げ 小さな挑戦を続けていく

今年度はテンギョーさんが9月から施設に通い始め、コーヒーの道具をそろえるところからスタートしている。テンギョーさん＝「気まぐれにやって来る友達」という立ち位置になることで、施設側は普段の安心した状態を保つことができていた。

今回初参加となる梶谷さんは、利用者さんが日頃感じていることなどを話し合い会である「愛の予防センター」を見学することから始めた。大学教授として入っていくのではなく「ライラの友達」として参加した。コーディネーターや運営スタッフもみんな利用者の方にとってはテンギョーさんやライラさんの「友達」である。この関係を大事にしてきたことで、1月にはリラックスして楽しめる雰囲気をつくり上げることができた。結果、最近通所を始めた利用者の方も今回の「哲学対話」で積極的に発言する様子が見受けられた。「友達」として多様な人々が参加できる状態をつくり続けることが、関わりのバリエーションをつくり出すことにつながる可能性を見せてくれた。

テンギョーさんやライラさんとハーモニーの関係は5年以上続いている。コロナ禍の自粛で自由に人々が集うことは今年も難しかった。それでも諦めず、二人の力を借りて小さな対話の場を設けていくことで、少しずつ友達が増えていく状況が実現された。そして今回の「珈琲どう？」は、何かをしたり、何かを学んだりという「目的」を持った人でなくても、ふっと立ち寄った人たちでさえも受け入れる豊かな場づくりの可能性が感じられた。



「哲学対話」に登場したキーワードをもとに雑誌や色紙から形を切り出して大きな紙に貼っていく。それぞれが感じたことやひらめいたアイデアを口にしながら、一つのコラージュ作品をつくり上げた。

コーディネーターとアーティストの動き

2022	
8/4	コーディネーターと施設の顔合わせ
8/16	アーティストと企画構想
8/24	オンラインで企画内容を打ち合わせ
9/5	コーヒーの道具を施設に納品・設置
9/6	コーヒーの淹れ方をメンバーに教える
9/28	テンギョーさんとオンライン打ち合わせ
10/5	タイトルロゴをつくる
10/19	ステンシルでスリーブやオリジナルロゴの入ったエプロンをつくる
10/20	メインプログラム①「珈琲どう？」+振り返り
11/28	後半の企画構想を打ち合わせ
12/8	オンラインで打ち合わせ
2023	
1/24	メインプログラム②「哲学対話とライラのコラージュワークショップ」
2/9	振り返り

参画施設・団体

ほうらい地域包括支援センター

ワーク

きむらとしろうじんじん（アーティスト）、BARBARA DARLING（アーティスト）、大西健太郎（アーティスト）、島田明日香（クラリネット奏者）、風間勇助（研究者）、蓮溪芳仁（建築家）、金田翔（アーティスト）

コーディネート

木下明・佐伯賢（ほうらい地域包括支援センター職員）、きむらとしろうじんじん（アーティスト）、富塚絵美・渡邊梨恵子（TURN LANDプログラム事務局）

認知症のイメージを 転換できるような 体験づくりができないか？



台東区にある「ほうらい地域包括支援センター（以下、ほうらい）」は、高齢者やそのご家族、認知症の方などを対象とする地域包括支援センター。地域の高齢者が生き生きと安心した生活を続けられるよう、社会福祉士・主任ケアマネージャー・保健師が相談や支援に応じる総合相談窓口となっている。

担当職員の佐伯賢さんの思いは、ネガティブな認知症のイメージを転換できるような体験づくりを企画できないかというものだった。そこで、福祉や医療では到達できない文化的領域のアプローチによって「認知症の人のため」ではなく、地域の人々の中で認知症の人も当たり前に参加できるプログラムを目指すところからスタートした。



写真中央が、きむらとしろうじんじんさん。素焼きのお茶わんに絵付けをし、その場で焼いたお茶わんでお抹茶が楽しめる「野点（のだて）」を実施した。まずは興味を持ってもらう入り口として、職員の方から「新聞をちぎる作業がいいのでは？」との提案を受け、新聞をちぎる作業にたくさん人呼び込めるように配置を工夫した。地域の人たちとちぎった新聞は焼成に使用した。

地域にひらかれた路上に 可能性を見出す 屋外アートプログラム

ほうらいと運営体制づくりや企画構想を進めるにあたり、コーディネーターがまず佐伯さんに紹介したのは、アーティストのきむらとしろうじんじんさん（以下、じんじんさん）。じんじんさんは、ほうらいに程近い路上を舞台としたアートプロジェクトの経験がある。佐伯さんはその内容を知ると「このプログラムは認知症の方にとっても適している」と評価し、まずはそのプログラムを実施していくことになった。

じんじんさんは、偶然も含めた多様な出会いの場として「路上」に可能性を見出し、表現活動を続けている。今回も、論理に基づいた価値が担保されていなくても、人や物事が存在できる場所としての「路上」を会場に選んだ。認知症の人もふらっと立ち寄れて、認知症であるかどうかを問わず当たり前に参加できるプログラムを目指そうと考えたのが、「オレンジ・ポコペン 路上実践プログラム」である。

さまざまな関心を持った人々が行き交う場にするため、じんじんさん以外のアーティストにも声を掛け、ライブ演奏や写真コンテストなどさまざまな表現形態のパフォーマンスプログラムを設けた。

また、認知症の方やその家族、地域の人たちが伸び伸びと参加できるようなアートプログラムにしていくために出入りを自由に、見るだけでもおしゃべりするだけでもOKとした緩やかな場づくりを目指した。

そうして、認知症であるかどうかは問わず、誰もが参加できるようなワークショップやパフォーマンスが路上で繰り広げられていった。



素焼きのお茶わんに絵付けをしている様子。日本語を母語としない地域の方も参加した。



哲学者のジュディス・バトラーの言葉が書かれた看板を担いで街の人に拍手を送る。アーティストのBARBARA DARLINGさん。



パフォーマンス アーティストの大西健太郎さん。街を移動しながら、各所で出会った人と「踊り」を交換するダンスパフォーマンス「まちに棲まう」を披露している様子。

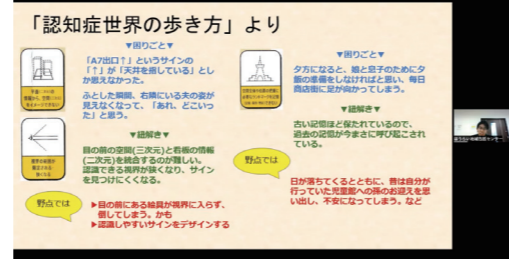


写真中央で見守っているのが、ほうらいの佐伯さん。左はコーディネーターの渡邊さん。地域のグループホームの利用者の方々が素焼きのお茶わんに絵付けをしている様子。グループホームの職員の方が機転を利かせ、高齢者が作業しやすい大きなテーブルや背もたれのある椅子を運び込んでくれた。

準備と振り返り

メインプログラム「オレンジ・ポコペン 路上実践プログラム」に向けた準備では、アーティストやボランティアスタッフが認知症について正しく理解するために「認知症サポーター養成講座」をオンラインで開催。イベント当日は、認知症の方が作業途中で何をしていたか分からなくなった時のため、スタッフを多めに配備した。イベント前々日にはプログラム説明会を行い、ほうらいの職員の方やアーティスト、ボランティアスタッフがつくりたい場のイメージを言葉にして共有した。説明会では関係者みんなで対応できる関係性をつくり、考え方を共有することができた。

イベント後の振り返りでは、「オレンジ・ポコペン」でのプログラムを通じて得た手応えをもとに、じんじんさん、佐伯さんから次の展開に向けたさまざまなアイデアが提案された。リサーチの段階や本番に向けた準備プロセスにおいても、認知症の方々と協働する場づくりの可能性へと視野を広げた。



オンラインで開催した「認知症サポーター養成講座」のレクチャー画面。資料には認知症の方がアートプログラムに参加した際に想定される行動などが例に挙げられていた。

ほうらい職員の佐伯さんの視点から再び地域に出会う

メインプログラム後には、佐伯さんの提案により、今後のリサーチを兼ねて地域を歩く「お散歩会」を実施している。じんじんさんやBARBARA DARLINGさんなどのアーティストも参加して、ラジオ体操を見学したり、地域の資料館を訪れたりした。資料館の副館長からは、革製品の産業が盛んだったという地域の変遷についてお話を伺った。副館長の熱のこもったレクチャーに、参加したアーティストや学生スタッフも心を動かされ、地域の歴史的な背景を知ることによって、その後の街の見え方にも変化があったようだ。この「お散歩会」によって、佐伯さんの地域へのまなざしを知ることができ、アーティストもコーディネーターも、地域の高齢者や認知症の方の暮らしについてもより深く具体的に想像する機会となった。



佐伯さんの案内で、ほうらい周辺の地域をアーティストと一緒にリサーチをしている様子。



資料館でたくさんの資料を広げて地域のことを教えてくれる副館長さん。

コーディネーターとアーティストの動き

2022	
8/12・24	コーディネーターが施設訪問
9/9	企画内容を打ち合わせ
9/21	イベント告知のためコーディネーターが地域のグループホームを訪問
9/22	「認知症サポーター養成講座」第1回
10/7	「認知症サポーター養成講座」第2回
10/8	ボランティアスタッフを対象としたプログラム説明会
10/10	1DAYイベント「オレンジ・ポコペン 路上実践プログラム」開催 【アーティスト】きむらとしろうじんじん/大西健太郎/BARBARA DARLING/島田明日香/蓮溪芳仁/風間勇助/金田翔ほか 【協力団体・参加施設】障がい者施設浅草みらいど、東京藝術大学熊倉純子研究室
10/12	振り返り会
11/24	次回に向けた企画の打ち合わせ
2023	
1/25	「お散歩会」1日目
1/26	「お散歩会」2日目
2/7	「お散歩会」の振り返り、打ち合わせ
2/14	打ち合わせ

参画施設・団体

はあとぴあ原宿

ワーク

永岡大輔（アーティスト）

コーディネーター

はあとぴあ職員、岩中可南子（コーディネーター）、藤井理花（コーディネーター）



「はあとぴあ」チームの企画会議の様子。左から永岡さん（アーティスト）、藤井さん（コーディネーター）、職員のお二人。TURN LANDプログラムに、どのように利用者さんや職員さんたちが関わっていくか、長期的な視野で相談しながら決めた。

地域との社会的接点をどうつくっていくか？

はあとぴあ原宿は渋谷区の中核となる障害者福祉センターで、サービスは施設入所支援、生活介護（通所）、短期入所、日中一時支援、児童発達支援など多岐にわたる。原宿という地域住民以外の人たちが主として多く行き交う環境の中で、入居や通所など利用形態もさまざまな利用者さんが集う。施設職員の方は、利用者さんの障害特性に合わせて歩くことを仕事としたり、クッキーを焼いたり紙すきを行ったりする工房での作業を割り振っている。そんな施設の利用者さんと、地域との社会的接点をつくることを目的として、これまでもアートプログラムに取り組んできた。

コロナ禍で未実施となった施設外でのプログラムを諦め切れない思いが職員さんやコーディネーターにもあったことから、前身のTURNから交流のあったアーティストの永岡大輔さんと、同じくTURNで協働していたコーディネーターもチームとなって、2022年度のTURN LANDプログラムが始動した。しかし未だコロナ禍から抜け切れない現場で、

どのように施設外の人々との接点をつくっていくかは変わらず課題となった。

都会のど真ん中の屋上を舞台に コロナ禍から再スタートする プロジェクト

新型コロナウイルスの感染症対策を考えると、大勢の人が施設に集まることが難しい状況で、施設のビルに屋上があることに着目し、ここが息抜きや出会い直しの場になる可能性を見出した。感染症対策に配慮し、人数を限定したプログラムであれば利用者も参加できる。菜園などがある屋上を使うのは初めての試みとなるが、利用者や地域の人たちにとっていろんな出来事が生まれる場所となるようなプログラム開発を目指した。

紙すき、機織り、藍染工房などを備えたはあとぴあ原宿は、アーティストにとって魅力的な環境が整った施設といえる。工房での手作業は東京の生活の中ではとても文化的魅力にあふれて見える。一方で、職員の方々にとっても、利用者の方にとっても、日々の割り当てられた仕事としてこなしている側面もある。永岡さんは職員さんや利用者さんが日常の作業自体を楽しく味わうことができるような時間を夢見た。自らが頻りに施設に通うことで、日常の中にどうにか文化的な時間をつくり出し、みんなが見ている風景を少しでも「TURN（変革）」していくことも大切だと考えた。まずはコロナ禍で交流できていない人たちに向けて「贈り物を送る」ことから始めた。さらに永岡さんは、継続的な実施を見据え、施設の日常を観察する中で見つけたアートの種を丁寧に紡いでゆく。食用にはならない「大きくなりすぎたオクラ」を干してオクラ茶をつくって職員さんと試飲したり、「歩く」ことを仕事にしている「あゆみ工房」の利用者さんたちが拾ってきてくれた葉っぱを使った「贈り物」を考案したりしながら、施設の日常でありながら「支援」の枠からは少しはみ出した文化的な時間を少しずつ広げていった。



施設には、歩くことを仕事にしている工房があり、利用者の方が地域を歩いて集めてきた葉っぱに絵やメッセージを描いて、コロナ禍で会えない人や会いたい人へ送る。封筒も手づくり。

施設に新型コロナウイルス感染者が出たときなどはオンラインでコミュニケーション。オンラインになってもいつもと変わらずキーボードを弾きながらお気に入りの曲を歌ってくれる利用者さんが場を和ませてくれた。





屋上で初めての公開イベント。オリジナルデザインのクッキーを施設内外の人たちみんなにお披露目した。クッキーには利用者さんが描いたイラストがあしらわれ、裏にも利用者さんがつくった「荒野」ロゴのシールが付いている。お気に入りの歌謡曲を歌ってくれる利用者の方も。

アーティストと共に施設に通い 関係性を育んだプロジェクトチーム

コーディネーターは永岡さんと共に毎週、施設に通っていた。ビル屋上の菜園でタマネギの栽培を手伝ったことで、職員さんとの距離が縮まった。

何度も通うことで、利用者さんが以前は見せようとしなかった秘密のイラストを見せてくれるようになるなど、信頼関係が深まり、利用者の方たちの多様な側面が見られるようになった。担当職員の方だけでなく、ほかの工房の職員さんに話を広げて展開することができたのは大きな収穫である。今年度の屋上でのメインプログラムにはたくさんの職員さんが様子を見に来てくれた。これまでのようにアーティストが実施するプログラムに利用者さんが参加し、担当する職員さんたちが見に来るといった構図ではなく、企画から実施までの全てのプロセスに職員さんや利用者さんが関わるようになった。今まで関わっていなかった協力者にも場がひらかれ、少しずつプロジェクトメンバーが増えていく。徐々に、付かず離れずで臨機応変に対応し合える運営基盤ができていった。



2022年度からスタートした屋上を拠点に展開するプロジェクトの名前は「原宿荒野」。植物が自生している場のように、さまざまな人や活動が自ら立ち上がり、共存するような場所を目指している。

福祉施設の屋上に 文化的時間をつくっていく

屋上で過ごす時間は、利用者や職員の方々にとって、いつもとは違う気楽さがあったり、伸びやかさがあったりする。屋上に毎週定期的に通うアーティストがいて、それに合わせて手伝いで参加する外部のゲストもいる。そうした関わり合いによって、利用者の方も安心して人の輪を広げていくことができるようになっていく。メインプログラムは、コロナ禍のため外部の人が参加する時間帯と利用者の方が参加する時間帯を分けて実施したが、ここを活用して地域にひらいていくことができる可能性も大きい。

施設にアトリエはたくさんあるが、その息抜きと出会い直しの場に屋上はなりつつある。施設に文化的時間をつくることを継続的に運営していくためには多くの職員の方々に理解されていなければならないが、その点で今年度はいろんな人の理解を得る準備が整えられた。



屋上にドーム型の小屋をつくって設置。菜園に活用できるビニールハウスとして作成したが、何に使うかはこれから考えていく。利用者さんや職員さんが疲れた時、一人になりたい時のシェルターのように使ってもらえる場所になるかもしれない。

コーディネーターとアーティストの動き

2022	
9/28	コーディネーターとアーティストが施設見学、企画運営会議
9/29	オンラインで企画の打ち合わせ
10/20	施設で活動、企画運営会議
10/26	屋上でタマネギの苗植えの準備、企画運営会議 「TURN LAND オンラインサロン」に屋上から参加
10/27	「似顔絵の会」復活、屋上でビニールハウスづくり、企画運営会議
11/4	「似顔絵の会」、企画運営会議
11/7・8・9	屋上でタマネギの苗植え手伝い
11/11	「似顔絵の会」、企画運営会議
11/18・25 12/2・9	「贈り物づくり」、企画運営会議
12/23	オンラインで「贈り物づくり」、企画運営会議
2023	
1/6	オンラインで「贈り物づくり」、企画運営会議
1/13・20	「贈り物づくり」、企画運営会議
1/27	メインプログラム「原宿荒野」屋上の小屋づくりと交流会
2/27	「贈り物づくり」、振り返り
3/10	扉を付けて小屋づくり完成

case 04 さくらんぼ フレLAND

参画施設・団体

さくらんぼ

ワーク

マダム ボンジュール・ジャンジ (アーティスト)

コーディネート

對馬尚美・戸村敦・浜野亜希子 (さくらんぼ)、岩中可南子 (コーディネーター)、横田紗世 (コーディネーター)



地域の人たちも関われる集いの場に

心身障害者福祉ホームさくらんぼは、豊島区在住の心身障害者を自立助長するために日常生活の支援を行っている施設。家族の死亡・高齢化・疾病などによって心身障害者が就労できなくなったり、福祉作業所への通所が困難になったりした場合でも、住み慣れた地域で生活していくことを目的としている。施設には、3年を最長とする長期利用者と一時的に宿泊利用する短期利用者があり、さくらんぼでは施設を利用していたOB/OGとのつながりを継続していくことを大切に活動している。

年に一度の施設のお祭りは、地域の人に関われるような集いの場として実施していたが、今回のプレLANDでは、アートの活動を通して、施設をより地域にひらいていくことが目標として掲げられた。



園長から、ジャンジさん (アーティスト) の活動を理解する必要があるため職員向けの自己紹介・体験会を行ってほしいと要望を受ける。動画やスライドでジャンジさんの活動を紹介し、職員向けのワークショップとしてジャンジさんの活動の一つである「ハグたいそう」を実施。人との距離感はさまざまなのでハグ=「抱きしめる」だけでなく「自分をハグする」「腕を合わせるだけ」でもいろんなやり方でOK! 同席した職員の方たちはジャンジさんの活動に興味津々。



多様性 (LGBTQ+) をテーマにしたアートの現場をまず職員さんたちが体験

さくらんぼ園長の工藤かおるさんと職員の皆さん、コーディネーターの岩中さんは、前身のTURNでアーティストとの交流を経験している。今年度どんなアーティストと協働するかを考えるなかで、職員の方々と打ち合わせで出た「障害者の多様な性のアイデンティティをどう考えるか?」のテーマを取り上げ、マダム ボンジュール・ジャンジさんに依頼することになった。ドラッグクイーンとして知られるジャンジさんは、あらゆる境界線を越えたパフォーマンスを披露していて、新宿二丁目にある「コミュニティセンターakta」の元センター長でもある。ジャンジさんの活動の中で職員の方たちが一緒に楽しめそうな「ハグたいそう」や絵本『It's Okay to Be Different』の読み聞かせを施設職員の方に向けてワークショップとして実施することに。アーティストの参加によってLGBTQ+の多様な価値観について楽しく学ぶことは、福祉サービスの幅が広がるのではないかと期待もあった。



交流会の案内チラシ



事前のワークショップで盛り上がった職員の方たちは、交流会でウィッグをかぶってみることに。同法人が運営するグループホーム職員へのヒアリングでも満場一致でジャンジさんを招聘することが決定し、グループホームの職員さんも参加してグループホーム交流会の場を活用したプログラムを実施することに。

アーティストと一緒に施設職員皆さんが アートプロジェクトを企画運営

今年度はアーティストとの交流を通して職員の方々にアートプロジェクトについてのイメージを広げてもらうことから始めたが、すぐに参加意欲を示してくれたのは予想以上の反応だった。メインプログラムの準備を進めるにあたって三者が話し合うなかでも、利用者の皆さんに発表の場をつくらうと意見を出してくれたのは職員さんだった。これまではアーティストが披露する作品を見る側だった職員の皆さんが提案する。

そうして迎えたメインプログラム当日。同法人が運営するグループホームからは、さくらんぼに以前入所されていたOB/OGを含む利用者さんたちが参加した。

利用者さんたちは自分が得意なことを披露し合う場面で、普段施設にいない外の人から声が掛かると盛り上がりを見せた。「特技をいかせる場を経験できたことが自信につながった」といった振り返りの意見が出ている。

今後は、地域の人が使用できる公民館のような場となっている施設1階に、集まりをデザインする話も出ている。既に外の人の方が面白がれるような魅力づくりはできている。人数を少しずつ増やす程度であれば、地域の人を呼んで交流することもできるはずだ。



コーディネーターとアーティストの動き

2022	
9/21	コーディネーターとジャンジさん打ち合わせ
9/22	コーディネーターが施設訪問
10/25	ジャンジさんが施設見学
11/22	オンラインで打ち合わせ
11/28	職員会議でジャンジさんの自己紹介&ワークショップ
12/28	オンラインで振り返り、「グループホーム交流会」の企画・打ち合わせ
2023	
1/11	メインプログラムに向けた準備と打ち合わせ さくらんぼが運営する豊島区内のグループホーム見学
1/21	メインプログラム「グループホーム交流会」
2/8	振り返り
3/8	打ち合わせ



職員の皆さんは、交流会当日のワークショップで自分を魅力的に見せるメイクや格好をして、チャームポイントをアピールすることに。交流会本番ではウィッグをかぶり、メイクをして登場。

case 05 だんだん TURN LAND

参画施設・団体

気まぐれ八百屋だんだん
大田区立池上福祉園
ステップ夢

ワーク

アーティスト3名

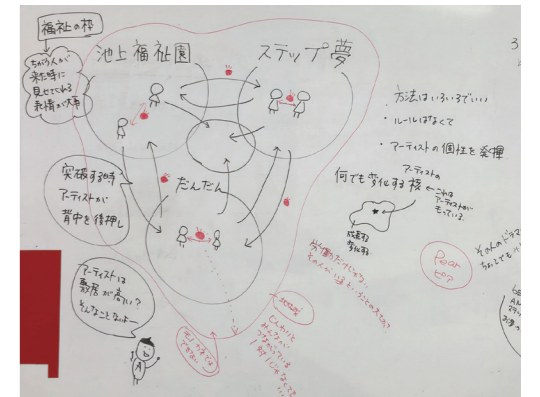
コーディネーター

近藤博子・澤田有司（だんだん）、菅沼剛（大田区立池上福祉園）、大内伸一（ステップ夢）、竹丸草子（コーディネーター）

地域を巻き込んで取り組む みんなの居場所づくり

一般社団法人ともしびatだんだん事務局が運営する「気まぐれ八百屋だんだん」は、八百屋でありながら寺子屋でもあり、こども食堂でもある民間型の文化センター。拠点としては小さいが、代表の近藤博子さんはこどもが自主的に行きたくなるような居場所づくりに尽力していて、地域イベント「こども天国」の実行委員も務めている。

TURN LANDに参画するにあたって近藤さんが近隣の福祉施設である「池上福祉園」と「ステップ夢」を紹介してくれたのは、地域でアートプロジェクトとの関わりを増やし、地域の福祉を考えていく可能性を広げようという狙いがあったためだ。しかし現状は福祉施設はお祭りなどの地域に向けた活動をして、地域の仲間として認識されにくい。福祉施設の利用者さんたちが生活しているのは施設の中だけではない。もっと地域を巻き込みながらできるプロジェクトを必要としていたのだ。



11月に実施した「地域コーディネーター」打ち合わせの記録。



気まぐれ八百屋だんだんが実行委員を務める「こども天国」(12/18)。地域の路上で行われるこのイベントに、アーティストも見学を訪れた。

3施設が参加して 「地域コーディネーターチーム」を結成

障害者福祉施設の大田区立池上福祉園は、知的障害や身体障害がある18歳以上の方を対象とした生活介護や、重症心身障害者通所事業を行っている。利用者さんも職員の方も、折に触れてアートに触れ合ってきたが、アーティストとの本格的な交流経験は、今回が初めてである。特定非営利活動法人ステップ夢はアルコール依存症の自立支援を行う就労継続B型事業所で、施設利用者の体調などによってどのようにアートプロジェクトに関わることができるのか分からない。そうした状況から、コーディネーターの竹丸さんは「だんだん」「池上福祉園」「ステップ夢」が参加するコーディネーターチームをまずつくり、アーティストを招きながら文化的な関わりによって地域にひらかれるしなやかな関係性をつくっていくことを目指した。



参画施設とコーディネーター、事務局メンバーがオンラインで打ち合わせする様子。

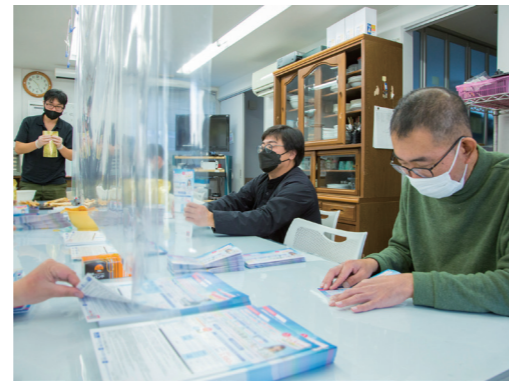
「福祉」「アート」という 言葉にくられることなく とにかく人と丁寧に会いたい

アーティスト3名がプロジェクトづくりに参加することとなり、「とにかく相手の話を聞いてみないと分からない」「まずは見学して、利用者さんたちに会ってみたい」「自分たちのことも知ってほしい」と施設に通い始めた3人の思いの強さに竹丸さんも驚きながら、地域コーディネーターの体制づくりに注力していった。

福祉施設が地域とまったく接点を持っていないわけではない。ステップ夢の利用者の方々が地域で草取りなどのお手伝いを仕事にしていたこともあり、その延長線上に新しいかたちのコミュニケーションを企画化できる可能性を感じていた。リサーチによってアーティストたちが提案したプログラムは、障害の有無にかかわらず目の前の人と表現を介して



12月にアーティストが池上福祉園とステップ夢を訪問。



アーティストが利用者が行う作業を体験し、施設の日常をリサーチ。



池上福祉園を訪問し、アクセサリ作業に取り組む利用者さんの傍らでほほ笑むアーティスト。アーティストの3人はオンラインサロンのやりとりも含めて交流しながらリサーチを進めていった。

無理のない付き合い方を生み出していくためのものだった。アーティストたちとの対話を重ねることで、職員たちの視野も広がり、企画会議での発言も積極的になってきている。

長期の目標は、施設の中だけでなく外との接点を増やししながら、誰もが地域の中でお互いを気にかけてくれる、柔らかい関係性と生きやすい居場所をつくることである。



今年度の活動報告の場である「TURN LAND ミーティング」(2023年2月実施)で、地域コーディネーターチームが他の参画団体・施設などに向けてのプレゼンテーションを行った。

コーディネーターとアーティストの動き

2022	
8/30	コーディネーターがオンラインで顔合わせ
9/16	コーディネーターがだんだん訪問
10/3	コーディネーターが地域イベント「こども天国」会議に出席
10/18	アーティスト候補を提案
10/19	「TURN LAND ミーティング」に池上福祉園が参加し、施設とアーティストとがオンラインで初顔合わせ
10/31	アーティストが池上福祉園を訪問
11/9	「地域コーディネーターチーム」の提案、ワークショップデザイン同好会(東京工科大学の学生)の紹介
11/11	「TURN LAND オンラインサロン」にアーティストがゲスト参加 池上福祉園とステップ夢とだんだんの職員も参加
11/14	オンラインサロンの振り返り
11/25	「地域コーディネーター」打ち合わせ
12/6	アーティストが池上福祉園とステップ夢を訪問・滞在
12/13	オンラインで打ち合わせ
12/18	アーティストが地域イベント「こども天国」を見学
12/20	アーティストが池上福祉園とステップ夢を訪問 アーティスト企画会議
2023	
1/19	アーティストがだんだんを訪問
1/21	アーティスト企画会議
2/2	「地域コーディネーター」打ち合わせ
3/10	振り返り

case 06 みかんの木／フェイト フレランド

参画施設・団体

みかんの木／フェイト

ワーク

パポとユミ（アーティストユニット）、大黒健嗣（アーティスト／地域コーディネーター）

コーディネート

齊藤果（みかんの木）、高井功一・目黒英之（フェイト）、大黒健嗣（アーティスト／コーディネーター）、岩中可南子（コーディネーター）、富塚絵美（TURN LAND プログラム事務局）



「みかんの木」は、活動できる部屋が一つしかないくらいの小規模な施設なので気分転換もしづらい。まずはみんなの精神を元気にするようなアートプロジェクトをしたいというのがコーディネーターの思いとしてあった。

都心の小規模施設で どんなアートプロジェクトが できるか？

放課後等デイサービス「みかんの木」は知的障害児・肢体不自由児を対象に、日常生活訓練や、集団での療育を行っている施設。「フェイト」は小・中・高校生で発達について支援が必要な子どもたちを対象に、学習支援や居場所づくりなどのサービスを提供している。

両施設ともに前身のTURNに参加した経験があり、コーディネーターの岩中さんもTURNの運営として関わっていたが、継続的にアートプロジェクトを運営できていないという課題があった。国道沿いのビルの1フロアにある小さな施設で、危険なために、利用者さんたちが外へ出るよりもアーティストが施設にやって来るプロジェクトを職員の方々は求めている、地域の人と関わることも難しい。また、放課後デイサービスはその名の通り放課後の時間となるので学校が早く終わる日でない、アーティストと交流できるようなまとまった時間をつくることができないという状況からスタートしている。

自然に体が動き出す サルサのワークショップ



「パポとユミ」

杉並区内でギャラリーカフェやアートホテルを手掛けてきた地域コーディネーターでもある大黒健嗣さんにコーディネーター兼アーティストを依頼。福祉施設との協働が初めてなこともあり、まずは施設を見学してから、一緒にできることを考えてもらう。施設は若い職員の方たちが多くアートへの理解もあるので少しずつ一緒にできることを考えていたが、大黒さんは中途半端な関わりにならないためにどう向き合えばいいかを探っている感じだった。

みかんの木で「パポとユミ」が実施していたダンスワークショップの見学に行った大黒さんは、利用者の方々がサルサを踊っている様子を見て自分たち以上の柔軟さを感じたという。「パポとユミ」は、障害者の身体特性もあって共通した何かをつくるプログラムよりも、音楽であればみんな平等に楽しむことができるのではないかとワークショップを行ってきた。みかんの木の職員さんから、音楽の力をあらためて感じられたので今後は保護者たちも入れるようにしていきたいという要望が生まれた。ダンスのワークショップはその日に来られる人が自由に参加していたが、予想以上に利用者の皆さんの反応が良かったため、保護者や卒業生も参加できる会に成長させていくことも考えている。



みかんの木では普段の活動の中でも歌ったり踊ったりして楽しむ時間があったり、利用者さんたちの反応も良かったことから音楽のワークショップを行うことに。前身のTURNで、ほかの福祉施設でサルサを通して交流した経験がある「パポとユミ」が毎回楽器を用いてサルサを楽しむ時間を提供。職員さんが驚くほど初回から利用者さんのノリが良かった。



1/30フェイトの企画会議。大黒さん（奥中央）からの提案は「宇宙人と地球人が行き交う港をみんなで構想したい」というもの。

“宇宙港”でのDJイベント

フェイトで企画している大黒さんプロデュースのDJイベントには「パポとユミ」も参加予定。大黒さんは「宇宙人の視点から見ると障害も肌の色の違いも誤差になる」としてアート活動にも取り組んでいる。今回のプログラムは奇想に思われがちな提案だったが、既に大黒さんに関心のあった職員の皆さんに受け入れられやすかった。自主運営は、一緒に企画運営する仲間をつくることから始まる。今年度は施設にアーティストの提案を受け入れてもらい、プログラムを実践していく段階の途中。3/9に初めての本番、DJイベントを行った。

コーディネーターとアーティストの動き

2022	
10/4	コーディネーターがみかんの木を訪問
10/24	コーディネーターがフェイトを訪問
11/9	「パポとユミ」ワークショップ@みかんの木
11/16	コーディネーターが、アーティストの大黒さんが主催する「うちゅうラボ」の活動を見学
11/21	大黒さんがフェイトで打ち合わせ
11/24・25	「パポとユミ」ワークショップ@みかんの木
12/18	オンラインで打ち合わせ
12/27	「パポとユミ」ワークショップ@みかんの木 ※新型コロナウイルス感染症等により中止
2023	
1/30	企画運営会議
2/15	「パポとユミ」ワークショップ@みかんの木
2/27	「パポとユミ」ワークショップ@みかんの木
3/9	大黒さんプロデュースDJイベント「オーロラダイバーポート」



「宇宙港」の企画をアートプロジェクトとして実践するための実験「オーロラダイバーポート」。写真は大黒さん扮するオーロラ・リッチ・ブラック。

参画施設・団体

西荻ふれあいの家

ワーク

Kim Doki (アーティスト)

コーディネーター

梅谷則子・宮浩子 (西荻ふれあいの家)、岩中可南子 (コーディネーター)



アートが入ることによる 可能性の広がりを経験してもらおう

認定特定非営利活動法人ももの会が運営する高齢者在宅サービスセンター西荻ふれあいの家。住み慣れた街で安心して暮らし続けるための地域福祉ネットワークづくりを目指している。

施設を活用して地域の人誰でも利用できる居場所づくりを目的としたオープンDAY「だれでもカフェ～ももふらっと」を展開するなど地域活動としての取り組みに積極性があり、地域の方々と連携して施設外の区民センターなどでも利用者の方たちが作品を発表している。前身のTURNではアーティストが施設に通い、アートプログラムを通じて高齢者から戦争体験を聞いたり、編み物を一緒にしたり交流を深めてきた。こうした交流の場を充実させ、もっとアートを活用し、活動の幅を広げていきたいという思いがあった。

今年度のプレLANDは、アーティストとのやりとりを含めて職員さんと一緒に場をひらくことを意識したプログラムづくりを目指す。



今年度のメインプログラムは、オリジナルの砂時計をつくるワークショップ。限られた時間での実施となったが、「時間」をテーマにしたワークショップを通して、普段施設での会話では出てこない思い出話を生き生きと語り出す利用者さんもいた。

時間をテーマにしたコミュニケーションで 世代を超えた交流

アーティストとして参加したKim Doki (以下、キムさん) は現代アート作家。前身のTURN事業を含めても福祉施設との協働は初めてとなるが、自身の祖母にまつわる作品も制作していて、人生や死生観をテーマに活動をしている。

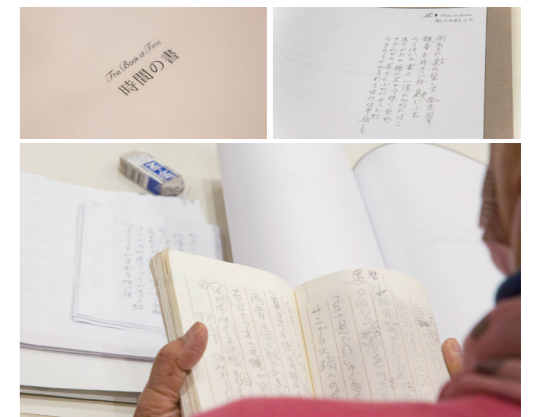
施設職員の方とのやりとりのなかで、自分と異なる世代の人々への理解が深まるようなことを考え、「時間」をテーマにしたプログラムを実施することになった。世代によって時間感覚の違いなどがあらわになり、互いの特性が引き出されるような活動となっている。施設を利用する高齢者の中には忘れやすい方もいる。プログラムに参加できるかどうかは体調や気分によって左右され、集中できる時間が短いことなどを職員の方からヒアリング。アーティストには戸惑いもあったが、コーディネーターは「みんなで実現させましょう!」と、共に場をひらく仲間として現場をサポートする。

施設でのワークショップは利用者さんの理解する延長線上で、どのような時間感覚の違いがあるのかを試みるプログラムとなった。職員の方は、利用者さんが普段は見せない表情をしていたり、昔の思い出が鮮明によみがえったりしていたことに驚いたという。アーティストがゲストとしてやって来ることは利用者の方々の皆さんにとって刺激的だったようで、自ら思い出の曲をピアノで弾いてくれた方もいた。

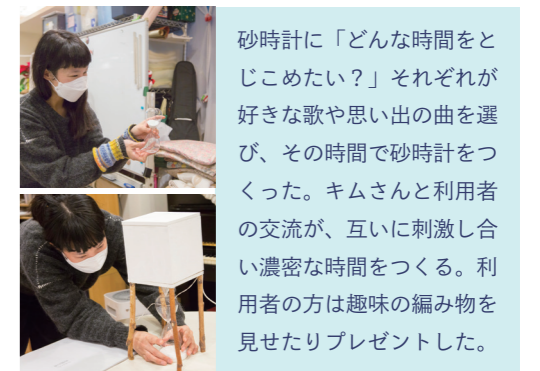
ワークショップで利用者さんがつくった作品は、「ももふらっと」などの施設を活用したオープンイベントで展示する。この展示を通して、作品について外部の人と話したり、いつもと違う話に広がっていくことを経験した。施設での生活の中で会話を引き出すツールとしても活用できる。今回の作品展示でより地域からの関心が深まっていくことも期待される。



キムさんが韓国からオンラインで開催したプログラムも、現場では職員さんが利用者の方の耳元で説明するなどフォロー。コーディネーターが現場で職員さんたちをサポートした。



アーティストのキムさんが制作した「時間の書」。高齢者の方が取り組みやすいように質問内容や言い回しなどは職員の方の意見を参考に改訂して、ワークショップに挑んだ。



砂時計に「どんな時間とどじこめたい?」それぞれが好きな歌や思い出の曲を選び、その時間で砂時計をつくった。キムさんと利用者の交流が、互いに刺激し合い濃密な時間をつくる。利用者の方は趣味の編み物を見せたりプレゼントした。



コーディネーターとアーティストの動き

2022	
9/28	コーディネーターが施設訪問
10/11	オンラインでキムさんと顔合わせ、企画会議
10/16	ワークショップ打ち合わせ
10/30	居場所づくりイベント「ももふらっと」の日にワークショップの打ち合わせ
11/14	オンラインワークショップのリハーサルと調整
11/18	オンラインで職員さんとワークショップのデモンストレーション
12/14・15	オンラインで事前ワークショップ開催
12/21・22	メインプログラム「Kim Dokiワークショップ(砂時計づくり)」
2023	
1/17	振り返りと打ち合わせ
2/19	「ももふらっとサロン」にて展示

参画施設・団体

クラフト工房 La Mano

ワーク

水内貴英（美術家）、飯塚純（美術家）、えんどうえこ（フラメンコダンサー）、ダニエル・リコ（カンタオール）

コーディネート

La Mano 職員、竹丸草子（コーディネーター）



職員みんなでアートプロジェクトの企画運営に関わる意識づくり

クラフト工房 La Mano（以下、ラマノ）は、障害のある人とない人が共に物づくりに励んでいる染織工房。

前身のTURNからアーティストが通っている施設ではあるが、施設長の高野賢二さんには、今回のプログラムはよりラマノの利用者・職員の皆さんがアートプロジェクトに関わってほしいという思いがある。アーティストと交流するその時間が、それぞれの気づきや成長につながるという高野さんの提案により、職員の方に向けたワークショップも始めることになった。

このTURN LANDの目標は、職員の方がもっと自主的にアートプロジェクトを企画・実施していけるようになること。2022年度はワークショップを繰り返しながら、アートを現場に導入することの可能性や効果を考える機会をつくっていった。

プログラムに招いたのはアーティストの水内貴英さん。コミュニケーションをとりながら徐々に形にして、スケールの大きな作品をつくって



工房に備えたこたつに入り、話しながら粘土で作品をつくり、そこに球根を埋めてラマノの敷地に置いておく。それは風雨にさらされながら、花を咲かせていく。普段利用者の人たちは藍染などを仕事としているので、こたつに入って粘土に球根を植える作業もうまく進められていた。

いくのが水内さんの制作スタイル。他の福祉施設とアートプロジェクトを行った経験もあり、共同作業に慣れていない職員の方も充実感が得られるだろうと考えた。

ラマノの敷地には畑や林がある。ランドスケープに手を加えて、この場所を地域の人と利用者の方々の居場所にしようという企画が持ち上がった。居場所の中心となるのはユーカリの木。この周りにデッキをつくるため、測量や基礎づくりをした。まず互いに知り合うために、こたつに入って話しながら粘土に球根を埋めるワークショップも行った。職員の皆さんにはコーディネーター目線でワークショップに参加してもらうことも意図していた。

今年度のTURN LANDプログラムで、コーディネーターの竹丸さんは施設長の高野さん、工房スタッフの三澤稔生さんを中心にコーディネーターチームをつくり、施設職員の方に向けたワークショップを実施してきた。

まず美術家の飯塚さんに「目の前の現実から何を切り取るのか」の写真研修を行ってもらい、次に音楽のワークショップで「変化し続けるものをどう切り取るか」のステップ。そして水内さんによる美術ワークショップが始まる。竹丸さんのコーディネーターチームが計画したスキルアップ研修の構想は、ものや出来事、変化する関係性をどう切り取るかを3講座のプロセスを通じて学ぶというものだった。



スキルアップ研修として実施した、飯塚さんによる写真のワークショップ。職員さん一人一人に、物事をどの視点で見るのかを意識してもらうことから始めた。

コーディネーターとアーティストの動き

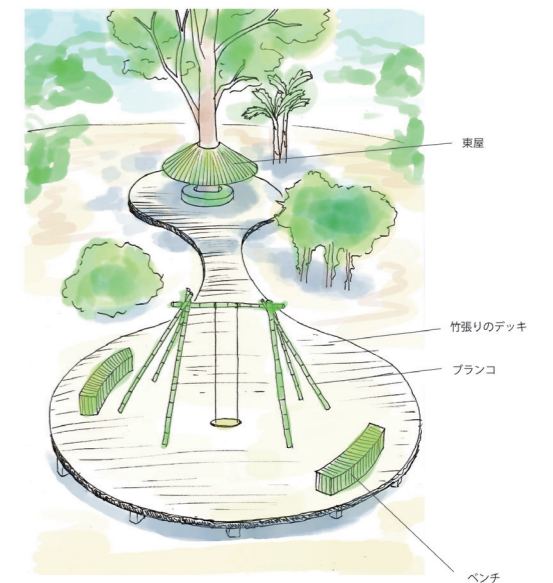
2022	
8/5	コーディネーターがオンラインで顔合わせ
9/15	コーディネーターが施設見学
10/14	オンラインで打ち合わせ
10/27	コーディネーターが施設で事業説明、水内さんがオンラインで顔合わせ
11/29	水内さんが施設を訪問 飯塚さん写真研修1回目
12/16	飯塚さん写真研修2回目
12/23	音楽・美術ワークショップ<中止>
2023	
1/16	測量
1/23	「はじめましてのワークショップ・みんなでこたつに入って春の妖精をつくる」
1/25・26	基礎づくり
2/21・22・24	「ともに在る場所ユーカリと竹のデッキ」制作
3/8	ダニエル・リコさんとえんどうえこさんによるフラメンコのワークショップ



アーティストが施設を見学。左は施設長の高野さん、右が水内さん。コーディネーターの竹丸さんと事務局の渡邊さんも同行。



コロナ禍で施設に通いにくくなった時期に、アーティストの水内さんが発行した「La Mano x TURN LAND通信」。



「ともに在る場所ユーカリと竹のデッキ」制作イメージ

参画施設・団体

板橋区立小茂根福祉園

ワーク

大西健太郎（アーティスト）、伊集院もと子（劇作家）、畑中研人（俳優）、浅野葉子（俳優）、小野龍一（作曲家）

コーディネート

小茂根福祉園職員、笹萌恵（コーディネーター）



それぞれが自分にとって「心地いい居場所」をつくっていく。居場所づくりのための素材がアーティストから手渡された。会場は小茂根福祉園1階入り口（ロビー）など。生活利用者3名と職員2名、就労利用者3名と職員1名が参加。

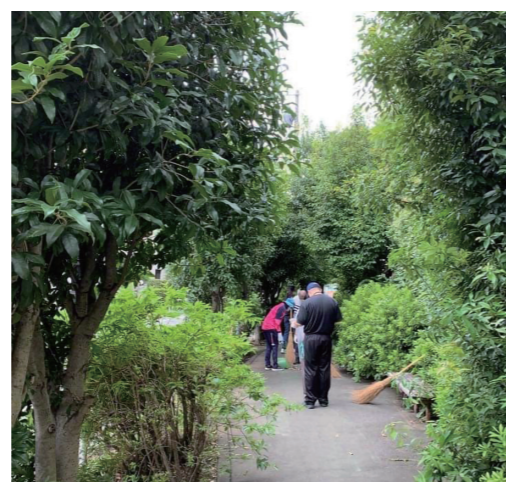
アーティストの思いをチームで引き受け
地域にひらく

知的障害者通所施設の板橋区立小茂根福祉園には、重度知的障害、また身体障害のある方が利用している。施設の規模が大きく、職員異動もある。施設が主体となって継続的にアートプロジェクトを進めていく体制づくりには時間を要してきたが、山中誠一園長の思いもあって園の全職員の理解を得てアートプロジェクトに取り組むこととなった。

前身のTURNでアーティストの大西健太郎さんと継続的な活動による関係性を醸成させてきた小茂根福祉園。これまでの活動経験から、今年度もそれまで協働してきた大西さんとコラボレートすることが職員の方たちの希望だった。

一方の大西さんには、施設が地域の人たちにとってもっと身近な存在となるよう、地域にひらいたプロジェクトにしたいという思いがあった。

大西さんは20数名の全職員が集まる会議に合わせてプレゼンテーションを行い、「施設」という単位の外へプロジェクトが展開していく構想を共有することに努めた。小茂根福祉園は大西さんの提案に魅力を感じ



アーティストの大西さんはリサーチを兼ねて、6月から施設に通っていた。写真は施設の利用者の方々による公園清掃に参加した時のもの。

つも、時間をかけて職員の意向をまとめ参画を決定した。

コーディネーターの笹萌恵さんを迎えた正式な体制が決まったのは年末となった。笹さんもまた前身のTURNから施設と関わりがあって利用者の方の対応に慣れている。コーディネーターが入ることで細かな窓口業務などをスムーズに進めていくことができる。しかし、全職員の一人一人が前向きに活動する体制づくりに向け、あらためてスタート地点に立つことができたのは、何よりも職員とアーティストがプロジェクトの立案、実施計画、振り返りに至るまで、全てのプロセスを粘り強く共にしてきた地道な場づくりのたまものといえる。

プログラムは小茂根福祉園にやって来る外部の人たちにも活動や参加者（利用者さん）の取り組みを知ってもらう機会となるように、施設の入り口で実施することになった。職員さん側から会場設定の提案を受けることができたのも、体制づくりに時間をかけてきた成果といえる。アーティストが何度もプレゼンテーションに通うことで職員の方がアーティストのイメージを共有し、体制づくりの検討や検証も行ってきた。利用者さんのためだけではなく、公的な意識を持つという点でも効果が見られるようになっていった。

1/31・2/1のワークショップでは利用者の方がお気に入りの耳栓（ヘッドホン）をして好きな本を読み始めたり、素材をちぎってまいたりと思いいに過ごせる場所ができ、自由度の高さはいい意味でアーティストの予想の範囲を超えていた。今後は街に展開する準備を進め、外に巡回していくプロジェクトへと発展させる。

今年度のプログラムは地域へのひらき方を提案し、一緒にワークショップを実施することで職員の方々と共に将来的なビジョンを描く大切なステップとなった。

コーディネーターとアーティストの動き

2022	
6/3	大西さんが施設を訪問、リサーチのための打ち合わせ
6/29	リサーチ(1):施設が清掃作業を行っている公園とアパート
6/30	リサーチ(2):物販@板橋区役所
7/28	大西さんが担当職員と打ち合わせ
8/5	リサーチ(3):マンション清掃
9/29	大西さんが担当職員にプレゼンテーション
10/12	職員会議でプレゼンテーション
11/22	大西さんとコーディネーターがオンラインで顔合わせ
11/30	事務局からコーディネーター提案
12/22	企画内容を打ち合わせ
12/26	オンラインでコーディネーター顔合わせ
2023	
1/28	ワークショップの準備
1/31	メインプログラム「風の通り道/隔てる場所」居場所づくりワークショップ1回目
2/1	居場所づくりワークショップ2回目
3/2	居場所づくりワークショップをパフォーマンスにして上演



12月22日に、アーティストが会場の下見をしている様子。施設内は生活介護と就労支援とでフロアが分かれているため、両方の利用者が通る場所を職員の方が選んでくれた。



「風の通り道/隔てる場所」居場所づくりワークショップの記録を素材として、大西さんがシナリオをつくり、それをゲストパフォーマーが上演した。



観劇後の利用者を舞台上に誘い、パフォーマーと共に舞台空間や素材と戯れる様子。ワークショップでつくった舞台装置に、創作の手が加わり更新された。

※3/2のパフォーマンス上演は距離を確保した上でマスクを外して実施しています。

参画施設・団体

ロートこどもみらい財団

ワーク

檜皮一彦（アーティスト）

コーディネート

荒木健史（ロートこどもみらい財団代表）、宮内芽依（コーディネーター）、富塚絵美（TURN LAND プログラム事務局）

オンラインでつながる こどもとアーティスト

ロートこどもみらい財団は、現在の教育制度の下で力を発揮しづらいこどもたちのためにコミュニティづくりやアイデア実現に向けた助成金、メンタリングを支援するほか、実践的な学びによってあらゆる領域の専門家や技術に触れ、自身のスキルやアイデアを磨けるようなプログラムの提供を行っている。

プレLANDではこどもがひきこもりなどの状況を認めてくれる先輩たちと出会えたり、こどもたちが行きたくなる駄菓子屋さんのような居場所づくりを目指す。コーディネーターが招いたのは、障害者であり不登校の経験もある檜皮一彦さん。ルールや構造を逆手にとり、自由かつしなやかに生きる方法を、こどもたちと一緒に考えたいの思いがある。

第1回のオンラインプログラムでは、こどもたちから作品について多くの質問があった。第2回では、オンラインだけでなく対面での参加枠を設けた。

コーディネーターとアーティストの動き

2022	
10/17	オンライン打ち合わせでアーティストを提案
10/31	アーティストとコーディネーターがオンラインで顔合わせ、企画内容を打ち合わせ
2023	
1/23	オンラインで運営会議
2/2	オンラインで運営会議
2/13	第1回「布を切ってつないで、自由に服をつくってみよう！」オンライン開催
3/21	第2回「布を切ってつないで、自由に服をつくってみよう！」オンライン&対面開催

参画施設・団体

CINEMA Chupki TABATA

ワーク

石井健介（ブラインドコミュニケーター）

コーディネート

平塚千穂子（CINEMA Chupki TABATA 代表）、舟之川聖子（鑑賞対話ファシリテーター）

ユニバーサルシアターを 語り合う場に

CINEMA Chupki TABATA（以下、チュプキ）は、全ての人と映画の感動を分かち合える日本初のユニバーサルシアターとして、2016年に開館。映画館としては20席と小規模だが、視覚障害者に映像の場面を逐次解説するイヤホン音声ガイドや聴覚障害者に向けた字幕、車いすを使う観賞スペース、乳幼児連れや感覚過敏の人のための防音の親子鑑賞室などが用意されている。代表の平塚千穂子さんは、チュプキの運営母体である「バリアフリー映画鑑賞推進団体City Lights」の代表でもあり、音声ガイドを使った映画鑑賞の環境づくりを20年以上にわたって牽引している。また、手話通訳付きの演劇制作を追ったドキュメンタリー作品を視覚障害者に伝えようと奮闘する人々をとらえたドキュメンタリー映画『こころの通訳者たち』（2022年）のプロデューサー、出演者でもある。

プレLANDでは、平塚さん、視覚障害者でブラインドコミュニケーターとして活動する石井健介さん、鑑賞対話ファシリテーターの舟之川聖子さんの三者がチームとなり、ユニバーサルシアター・チュプキのさらなる可能性を探っていく。

2月に開催したキックオフ会には、ユニバーサルシアター設立を計画中の起業家や、映像制作会社で作品のバリアフリー化を進めるディレクター、ラジオ番組プロデューサー、アニメーション作家、アクセシブルな舞台の情報発信や観劇支援を行うNPO代表らが集い、音声ガイドづくりの楽しさや可能性、実践を通して得た感覚や感性について情報を交換した。今後もさまざまな分野や属性を持つ人たちと、バリアフリーやユニバーサルをキーワードに、課題や展開方法について語り、出会う、「サロン」の創造を目指す。



（このブロックは上記のImage 2のCaptionと重複するため省略）



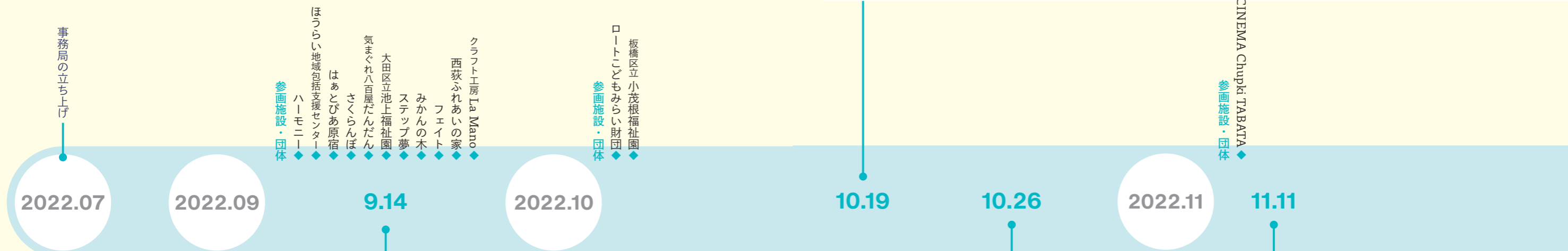
（このブロックは上記のImage 3のCaptionと重複するため省略）

コーディネーターの動き

2022	
12/25	コーディネーターが参加、オンラインで企画運営会議
2023	
1/11・13	オンラインで企画運営会議
1/24	企画運営会議
2/8	「プレLAND Chupki キックオフ会」
3/1	「プレLAND Chupki キックオフ会 パートII」

年間を通して プログラム実践と学び合いの場を展開

2022年度は全11件のプロジェクトで、それぞれの担当コーディネーターやアーティストがチームとなってTURN LANDプログラムを進めてきました。TURN LANDプログラム参画施設・団体の職員の方々をはじめとしてアーティスト、地域の協力者などが集い互いの活動について報告し合う場を設けたほか、対話によってアートプロジェクトの運営を学び合う「TURN LANDオンラインサロン」を9月から毎月開催。それぞれの活動背景をヒアリングしながら現場で抱える葛藤などを分かち合うことで、さまざまな壁を乗り越えるためのクリエイティブな思考力を身に付けていきました。



TURN LAND ミーティング

これまでに参画した全施設の職員をはじめ、アーティストやコーディネーターが参加。



第1回 TURN LAND オンラインサロン

TURN LAND (第1回) オンラインサロン 2022.9.14 (WED)

16:00 ごあいさつ・主旨説明
16:10 アーティスト 大西健太郎さん インタビュー / ショート
17:00 意見交換
17:30 終了

本日のアーティスト

大西 健太郎

参画施設・団体

施設職員やコーディネーターがオンラインで集う場。ゲストに参加アーティストを迎え毎月1回開催。第1回は小茂根福祉園チームのアーティスト大西健太郎さんをゲストに迎えて開催。福祉施設でアートプロジェクトを進めるにあたって不安や戸惑いがあったことを参加メンバーで共有しました。

第2回 TURN LAND オンラインサロン

TURN LAND サロン Vol.2 2022.10.25 @zoom

ゲスト 永岡大輔さん

2回目のオンラインサロンは、渋谷区障害者福祉センター はあとびあ原宿から中継を結んでの開催。ゲストに迎えたアーティストも、はあとびあに通う永岡大輔さん。前身のTURNから交流を継続しながら今年度のTURN LANDプログラムを進めてきたプロセスが紹介され、視野を広げることや経験を蓄積することを学びました。

第3回 TURN LAND オンラインサロン

TURN LAND サロン Vol.3 2022.11.11 16:00~

だんだんチームに参加したアーティスト3名から、それぞれの活動や3人が協働した小屋づくりのアートプロジェクトなどが紹介され、参加メンバーとの意見交換では「アート」「福祉」という言葉でくられる「以前の領域」の重要性や多様性の尊重へと話題が広がりました。

第4回 TURN LAND オンラインサロン

ゲストアーティストの水内貴英さんは、自身も聴覚障害のある家族の中で育ってきたことを踏まえ、活動事例として2歳未満の子どもを対象にしたワークショップを紹介。ポイントとなるのは言葉による意思の疎通が難しくても意図を伝え、テーマを設定すること。今回の参加メンバーであるほかの施設職員やコーディネーター、事務局スタッフは、障害のある施設利用者との交流も同様に言語だけに頼らない信頼関係の構築を大切にしたいと共感。今年度のTURN LANDで始動する水内さんとLa Manoチームへの期待が寄せられました。



TURN LAND ミーティング

2022年度を振り返る全体ミーティングも会場とオンラインのハイブリッド開催。11チームの施設職員をはじめ、アーティストやコーディネーターが今年度の活動を報告し合いました。東京都の職員も参加。



TURN LAND オンラインサロンで話した内容を コーディネーターの竹丸さんが記録した手書きメモ



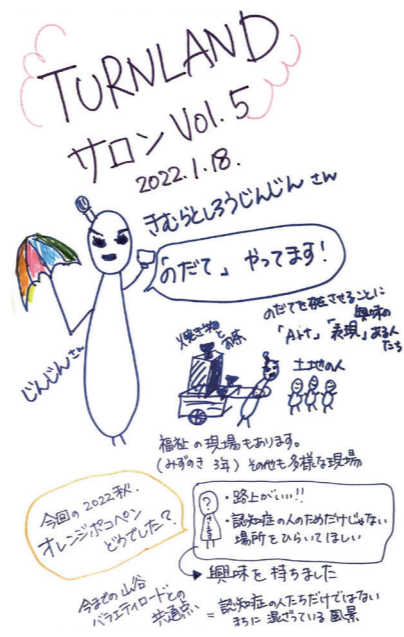
2022.12 12.21

2023.1 1.18

2023.2 2.17

第5回 TURN LAND オンラインサロン

最終回のゲストは、ほうらいチームでメインプログラム「オレンジ・ポコペン」を実施したきむらとしろうじんじんさん。リヤカーに窯と素焼きの器を積んで各地を回り、その場でお茶わんに絵付けをしたりお茶を飲んだりできる活動を繰り返しています。今年度のプログラムを振り返りながら、ひらかれた場である「路上」には、作業に没頭する認知症の人の時間軸や茶わんの焼き上がりを気にするじんじんの時間軸、それを遠くから眺めている人の時間軸、そこに集う人の接点を楽しんでいる人の時間軸など、複数の時間が存在していると説明。参加メンバーも誰もが入ったり出たりできる場の面白さと難しさについて意見を出し合い、路上の風景が人に与える影響や可能性について語り合いました。



パンフレットを制作 『Let's start TURN LAND プログラム!! ~まずはやってみる!~』

TURN LAND プログラムへ参画した福祉施設やアーティストの皆さんに向けて、パンフレットを制作しました。今年度の取り組みを進めるなかで上がってきた質問などに答えるQ&Aも掲載しています。



領域横断型の アートプロジェクトの基盤づくり ～質問し合える環境をつくる～

2022年度からのTURN LANDプログラムはコーディネーターが伴走しながら進めるという、新たな試みとしてスタートしました。協働するコーディネーターを統括した3人が、初年度の取り組みを振り返ります。

加藤未礼

一般社団法人TalkTree代表理事。特別支援級の介添え、雑貨インテリアショップの店員を経て、2008年より障害のある人が通う施設の商品企画、販売計画などを施設スタッフと一緒に考え、その支援の根幹にある価値を見出し、課題の解決を行う。福祉の枠を超えたあらゆる現場で、異なる意見を持った集団が一つの目的を意識した活動をしていくためのワークショップをデザインしている。



竹丸草子

artenarra代表、NPO法人芸術家と子どもたちアドバイザー、東京工科大学教養学環非常勤講師、NPO法人ことふらボ理事。美術教育、アートプロジェクト、障害者文化芸術支援の分野でプロジェクトコーディネートやファシリテート、企画運営を担う。近年は実践コミュニティの醸成やアーティストワークショップ、コーディネート論について研究している。



富塚絵美

TURN LANDプログラムの事務局を担う〈谷中のおかって〉の総合ディレクター。前身のTURNには、初年度の2015年からアーティストとして毎年参加。



コーディネーターの 役割とは？

——今年度からの「TURN LANDプログラム」は、各福祉事業所・施設が自主的かつ継続的にアートプロジェクトを展開できる体制づくりを目指して始まりました。障害福祉事業所にデザインやアートを導入するプロジェクトを経験してきた加藤未礼さんと、アーティストと教育や福祉が出会い場のコーディネートや実践コミュニティについて研究する竹丸草子さん、アートプロデュースを経験してきた富塚絵美さんの3人が現場のコーディネートを統括しています。初年度となるTURN LANDプログラムは全11件。そのうち約半数が前身のTURN^(注1)から関わりのある施設です。注1) P1の事業概要を参照

富塚：前身のTURNに参画してきた福祉事業所および福祉施設の方々に、それぞれ現場の課題や継続実施することで実現したいビジョンについてヒアリングすることから始めました。長く関わっているところでは、TURNが始まった2015年からなので7年間になります。事業所や施設の規模、運営方針に即したアートプログラムを展開してきているのですが、アートに関わる時間を、どうにかこうにかつくり出しながら、アーティストたちと共に経験を積み重ねることを優先してきたという印象です。やってきたことを自己評価し、言語化することがままならず、疲れている印象のところもあります。職員の異動によってノウハウが蓄積されていないところは、継続的な運営に向けた運営面の立て直しが必要でした。

加藤：私がヒアリングをしてきたなかで、感じたことが二つありました。1点目は、福祉の現場で働く職員の方

ちが「自分たちの活動の中にアートをどう位置付けたらいいか」を、まだ組織の中に落とし込めていない印象があったこと。2点目は、専門分野ではないアートに取り組むことへの戸惑いや、アーティストたちの意向をくみ取りながら新しい挑戦をすることへの難しさがあったのではないか、ということです。

そうしたハードルをいかに低くするかを今年度の取り組みに反映していきたいと思いました。

富塚：アーティストとの協働活動を自主的に引き受けることを目標にしましたが、実際にはそれを理解してもらうことに時間がかかったところもありました。

竹丸：アーティストがやろうとしていることを「完全に分かる」ということは不可能なので、とりあえずやってみる。そのことが意外に難しいですね。

富塚：責任感の強い組織ほど、継続実施のためには複数人で担う必要があることをすぐに理解されます。しかし、普段の業務に追われている状況の中で「分からないもの」が含まれていることを前提とするアートプログラムを扱わなければならない。その覚悟を迫られることになります。

ゴールを最初に設定するのではなく、成果さえも創造しながら進めていくのですが、それをマネジメントすることがどういうことかの理解が難しい。それは創造性を含む現場のマネジメントについて、経験がないために起こることだと思います。組織で引き受けるときに、どんなリスクマネジメントをすべきなのかの手法を持っていないケースがほとんどです。

私たちが一緒にやるのだから、本当は「やってみたい」という思いがあればできるんです。それに向けたミーティングの時間と場所さえつくることができれば十分。でも、どうリスクマネジメントすればいいのか分からない、あるいはそれを価値化する言葉を持っていないために、組織として「やる」という答えを出せないケースもありました。

加藤：そうなんです。TURN LANDオンラインサロンに参加してみたり、プロジェクトをとりあえずやってみたりすることが必要だと思うんです。ただ、現場を回す人数が限られている中で、サロンへの参加ができない職員の方もいらっしゃいます。参加しやすい設定をもう

少し検討する必要があると考えています。

富塚：思えば「分からない」を大切に抱えながら進む、アートプロジェクトのマネジメントの在り方を共有するための一年でしたね。

竹丸：学び合うためには、互いを理解しようとする姿勢で対話を重ねなければなりません。そうして「分からないことを聞いていいんだ」という信頼関係をつくるのが大切です。施設の職員さんとアーティストが一緒になって小規模プログラムを始めてみたり、アーティストが施設を見学したり施設の行事を見に行ったりしながら、互いの活動や環境を学び合うことに時間を注力しました。

加藤：アーティストが施設を見学に行くと、利用者の方とのコミュニケーションが自然に始まりますよね。

竹丸：施設の利用者さんと話しながら言葉遊びを始めたり、いきなり相撲を取りだしたアーティストもいましたね。アーティストが利用者の方と交わり始めたら、もうプロジェクトが順調に進んでいると思っていいんです。

アートを自分ごとにする 運営メンバーをつくる

加藤：社会福祉法人のミッションには「地域交流」や「地域貢献」も含まれているので、こうしたプロジェクトへの参加をいかすこともできると思います。また、福祉サービスを利用する人たちにとって本来はそれの中だけで生活しているわけではないので、地域の中に理解者を増やしていくことも大切です。

富塚：福祉事業者が「アーティストのしたいことを実現させてあげる」という受け身の向き合い方をすると、負担になって続かなくなってしまう。アーティストが考えたアイデアを職員さんやコーディネーターと一緒に企画に落とし込んでいくべきです。それを実施できるようになることがTURN LANDの目標でもあります。プロジェクトを実現する過程に要する時間や体験が大切。利用者さんのみを対象とするのではなく、地域や

社会にどう還元されるかを想像できるようになることが必要です。そのためのファーストステップとして、福祉職員向けのプログラムをつくったところもたくさんありました。

竹丸：プロセスを通じて「自分はコーディネーターなんだ」と自認していくことができます。そしてそれが複数人のチームとなって、運営体制ができ上がっていきます。

富塚：竹丸さんが担当されていた施設などでは、地域のコーディネーターチームができたり、職員の方を対象にしたプログラムが動き始めたりしたところもありましたね。

竹丸：そうですね。コーディネーター育成を目的にした「スキル研修」にアートプロジェクトとして取り組んでいます。これまでは施設長が自らアートプロジェクトを回していた施設で、これからは全職員が企画運営に参加する状況をつくりたいという要望がありました。そこで行ったのが「写真を撮る研修」です。いわゆるカメラの使い方を教えるのではなく、状況をフレーミングすることを通じてものの見方、向き合い方について考えてもらうものです。職員の方たちはもともと施設のオリジナル商品をどう撮影するか、あるいは利用者さんが普段いる場をどうやって撮ればいいのかを知りたいという思いがあったので、その期待に応えつつ行いました。写真の次は音楽、そして美術と異なる分野のアート体験を通じて「何を見るのか」を体験してもらおうと思っています。

加藤：竹丸さんはチームビルディングをしつつ、コーディネートをしている感じですね。

竹丸：アルコール依存症の方が利用されている施設、生活介護、こども食堂という、異なる3施設の職員さんが「地域コーディネーター」としてチームになって始動しているケースもあります。この地域コーディネーターチームをつくる時、地域にどんな風景を見たいか、みんながどうしたいか、聞いてみたんです。職員の方たちの答えは「アーティストが施設やその地域に通うことで、彼らに出会った人々が感化されて、街の日常の中に面白い場所が増えていく……」そんな感じだったんですよ。なんとなくみんなが同じ理想イメージを抱いて

いたことに、気づかされました。

加藤：「どうなったらいいと思う？」と問いかけることって大事ですね。

エリア的(面)に広がる 新たな展開

——今年度から新しく参入した施設は、TURN LANDプログラムの「プレLAND」と位置付けています。TURNから継続している施設とは異なる点や、3人が今までに経験してこなかったような展開はありますか？

富塚：障害者のためにひらかれた映画館のような文化施設「CINEMA Chupki TABATA」やオンライン上のプラットフォームを活動の場とする「ルートこどもみらい財団」などがあります。こうした事業者との連携は、新しい展開ですね。地域包括支援センターの参画もあり、高齢化社会のこれからを考えるととても重要な広がりだと考えています。

また、「プレLAND」だけを対象としているわけではありませんが、TURN LAND プログラムに参加する全ての人が学びを共有し合える場を設けています。参加する施設職員の方々やアーティスト、コーディネーター、事務局スタッフ全体で集い報告会をする「TURN LAND ミーティング」と、アーティストの意図を共有し、学び合うための月例オンラインサロンを開催してきました。これらは各現場と並走する関連プログラムとして位置付けています。

加藤：今年度のオンラインサロンは、ゲストのアーティストが毎回違っていましたね。参加されている福祉職員の方や私たちコーディネーターが自由に質問し合えるので、お互いの活動を知ることができました。アーティストによってさまざまな展開の可能性があることを知り、こうした交流から得られる気づきは深いものです。自分たちが進めているのとは違うプログラムに取り組む施設やアーティストたちと交流することによって、お互いが刺激を受けていました。

富塚：現場と関係なさそうなたわいもない会話が、案外、現

場の次のステップを見出すきっかけになっていたりしていましたね。

竹丸：他分野の専門家から話を聞いて学ぶことができるのは、絶対に楽しい。世の中のあらゆる人にとって大事なことだと思います。

富塚：新しく参加したアーティストたちは、「福祉」や「障害者」にまつわる社会の偏見に惑わされないようにと意識していた印象があります。個々がまず人として出会うために、「アーティスト」という肩書きや立場で出会うことすら回避したいと考えるアーティストもいました。

竹丸：そうですね。新規参入アーティストは、施設職員の方や利用者さんに自己紹介するような意識でプログラムを実施していたように思います。「福祉」と「アート」の領域を横断する、その葛藤や戸惑いをそのまま形にしたアーティストもいましたね。

富塚：同じ地域で別の福祉事業所を仲間にするすることで、より地域に浸透していこうとする動きが見られたのも新鮮でした。また、地域包括支援センターが施設の外でプログラムを展開することで、連携する地域の事業所が複数参加できる場をつくり出したのも予想以上の成果でした。

コーディネーターが 入ることによる変化

富塚：前身のTURNから参加してきたアーティストたちも、今年度になってからプログラムのスケールを変えたがあったという動きもありました。これまではアーティストが直接、施設職員と運営面をどうするかを調整していく相談相手も担っていたケースが多かったので、アーティストはやりたいプログラムを提案しづらい面があったようです。今年度、コーディネーターが入った途端に「本当はやりたかったことが別にあった」とか言い出すんですよ。運営の相談に乗る役割としてのコーディネーターが付くことは、むしろアーティスト側の望みでもあったことに気づかされました。

加藤：福祉事業所側も、「利用者ファースト」になりすぎて、利用者の方だけを対象化してしまう傾向があります。

富塚：そうなんです。なのである施設職員の方が「利用者のためにやらないことが利用者のためになるんです！」と最初に言ってくれたのは驚きでした。配慮はするけれど、対象化しないことによって、誰もが関わりたくなるような余白やバリエーションが生まれ、多様な参加の仕方を可能にします。

加藤：コーディネーターがいることによって、そうした言葉も引き出されたのだと思います。福祉側の人たちとアート側の人たちのどちらを優先するでもないファシリテーターがいたからこそ、両者の要望を聞くことができますし、取り組むべき課題も見えてきたのだと思います。

富塚：コーディネーターは、単に現場をスムーズに回すためのサポート役ではなく、事務局やアーティスト、連携先施設、利用者の方々や地域の人など、多様な立場の人たちが関わる場自体をひらく人であり、その場が保たれるようにするという重要な役割があることを忘れてはいけません。

竹丸：特に重要なのが、現場に携わる人たちが自然に自分たちのプロジェクトの価値に気づくように「振り返りの時間をつくる」ことなんです。評価や成果は、外からの指標による判断をイメージしやすいけれど、現場の人たちで「重要な変化は何か？」と問いかけ対話することの方が大切です。気づきを生み、学び合うことにもなるので、そのことが現場の価値をも高めていくんです。

富塚：アートの現場なので、一般化できないところにも価値があります。どんなアーティストが関わるのか、どんな場所でやるのか、その状況に合わせてオーダーメイドな運営の仕方を考えていく。その現場が潜在的に何を必要としているかを丁寧に読み解きながらコーディネートをしています。その場にしかない唯一無二のものを運営する喜びを、関わる皆さんに感じてほしいです。

オンラインで楽しむ

「TURN LAND プログラム」

TURN LAND プログラムの活動の記録を公開。
施設やプロジェクトの様子が楽しめる動画や
アーティストのプロフィール等も紹介しています。

<https://turn-land-program.com/>



主 催 東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、
一般社団法人 谷中のおかって

TURN LAND プログラム 2022 ドキュメント

2023(令和5)年3月23日

企 画 公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

制 作 一般社団法人 谷中のおかって

撮 影 梅田 彩華 (P4, P5下3点, P6, P7上2点, P8, P9上3点, P10上, P11, P12, P13上
2点, P14~18, P20右3点, P21左, P22, P23右上, P24~26, P27左と上, P29下3点,
P31, P33, P35)、小野 悠介 (P9下, P28上2点)、ほかスタッフ関係者

編 集 aTs企画所 西内 亜都子

デザイン HON DESIGN

印刷・製本 株式会社 渋谷文泉閣

発 行 公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
〒102-0073 東京都千代田区九段北4丁目1-28
九段ファーストプレイス5階
TEL 03-6256-8435 FAX 03-6256-8829
<https://www.artscouncil-tokyo.jp>

※営利、非営利を問わず、当資料のコンテンツを許可なく複製、転用、販売など二次利用することを禁じます。



ARTS COUNCIL TOKYO